

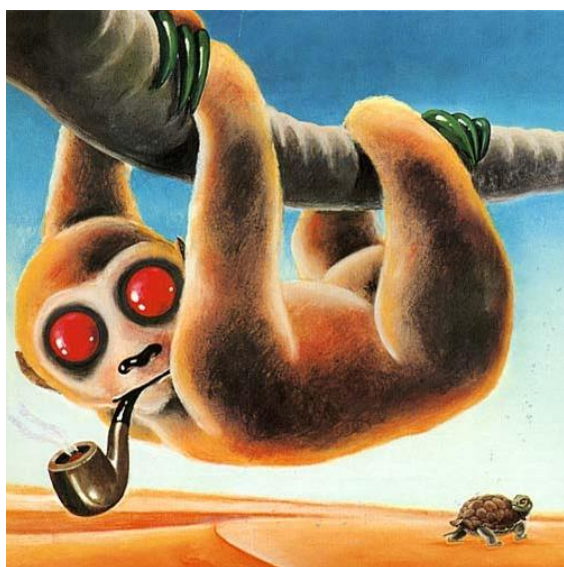
筆者は、2007年から2009年にかけて長崎新聞のウェブサイトの連載企画「長崎新聞@コラム」に記事を書いてきた。この文章は、2008年7月4日同コラムに掲載された記事に、若干手を加えたものである。「長崎新聞@コラム」は、すでに連載が終了し現在閲覧できない。(2016年6月)

ロックの女神が微笑むとき

満岡渉

「四人囃子(よにんばやし)」というバンドがある。知る人ぞ知る、わが国の伝説的なプログレシブ・ロック・バンドだ。今でも現役で活動しているが、彼らをもっとも存在感があったのは1970年代である。四人囃子がどんなバンドかご存知でない方には、彼らが当時、「日本のピンク・フロイド」などと呼ばれていたといえ、ヒントになるだろうか。

確かに四人囃子がライブでピンク・フロイドの曲を演奏していたこともあったので、そんな呼び方はまったく的外れでもない。しかしピンク・フロイドやオールマン・ブラザーズやサンタナなどからモチーフを借用していても、彼らにはゆるぎないオリジナリティーがあった。



彼らの実質的デビューアルバムにして不朽の名作である「一触即発」(1974年)を聴けば明らかなように、そのオリジナリティーは日本の風土と季節感に根ざした、真にユニークなものだ。

発売当時鹿児島の一高校生だった僕は、その魅力に取り憑かれて、「一触即発」を擦り切れるほど(レコードですから)聴き込んだ。

さて、ある日「レコード・コレクターズ」誌を見ていたら、その「四人囃子」のボックスセット「From The Vaults 2」近日発売の広告を見つけた。「From The Vaults」というのは、彼らの未発表音源を収録したマニア向けのボックスセットで、今回はその第2集。第1集は2001年に発売されている。



通常未発表音源といえ、公式に録音したが発表されなかった曲や演奏(スタジオ・アウトテイクや未発表ライブ音源)を指すが、「From the Vaults」シリーズには、会場録りのライブ音源も収録されている。つまり、ファンが会場にテープレコーダー(70年代ですから)を持ち込んで録音したプライベートな音源を、四人囃子側が収集して公式盤として発表するわけだ。このようなものをオフィシャル・ブートレグと呼ぶ。

こうした会場録りの音源は、普通はカセットテープに録音されていて、もちろん音質は悪い。CD化するにあたって、ピッチを調整し、ノイズを取り除き、イコライズして、音を可能な限り磨きあげるのだが、それでも限界がある。しかしマニアとしては、会場録りだろうが、音が悪かろうが、とにかく聴きたいのだ。

で、その「From The Vaults 2」の広告を見ると、CD5枚組の最後に、驚きの音源が収録されていた。1975年1月15日、鹿児島文化センターのライブである。僕は興奮に震えた。そうです。当時鹿児島の高校1年生だった僕は、その日その時、まさにそのコンサート会場にいたのである。

1974年「一触即発」をリリースして一躍僕らロック小僧のヒーローになっていた四人囃子が、矢沢栄吉率いるキャロルの前座として(どう考えてもミスマッチだ)、鹿児島を訪れるというニュースが流れたのは同年の秋だったろうか。あの憧れの、和製ピンク・フロイドの、レコード擦り切れの四人囃子が鹿児島にやってくる!!僕は同級生7~8人と、はちきれんばかりの期待を胸に見に行っただのだ。

1975年1月15日、ついに四人囃子は鹿児島文化センターにその雄姿を現した。

オープニング・ナンバー「おまつり」から最後の「一触即発」まで全5曲、きっちり60分。前座なので短めのステージだったが、今思えば圧倒的な演奏だった。しかしヒネた高校生だった僕らは、一丁前にいろいろと批判めいたことをいいながら(ギターの森園のソロはいまいちリズム感が悪かったな、とか)、鹿児島文化センターを後にした。実を言えば、会場で聴いたときには、音があまりにデカくて、演奏の良し悪しなどまるで分らなかったのだ。



いずれにしろ、忘れもしない高校時代の一大イベントである。あの時の演奏が「From The Vaults 2」に収録されている！これを聴かずして何を聴く！僕は早速「From The Vaults 2」をアマゾンで予約注文した。

しかし、僕が興奮した理由はそれだけではない。実は僕らは、そのときのライブを録音したのだ。僕が録音したテープは、聞くに堪えない音質だったが、一緒に行った友人Fは高性能のステレオマイクとテレコを持ち込んで、わりと良好な音質で録音することに成功した。僕らは皆、Fのテープをダビングしてもらったのだが、聴いてみると、思っていた以上に素晴らしい演奏で、以後僕はずっと愛聴していた。写真がそのテープだ。



それから30年近く経ったある日。僕はネットで、四人囃子の音源を集めているというマニアと知り合いになり、お互いが持っている四人囃子のレア音源をMDでトレード(交換)することになる。僕が渡したのは、例の友人Fがダビングしてくれた鹿児島でのライブである。

勘のいい読者の皆様はすでにお気づきでしょう。僕が興奮したのは、この「From The Vaults 2」の鹿児島ライブ音源が、僕がトレードで渡したテープ(MD) そのものなのではないか、と思ったからだ。

.....

注文して1週間後。待ちに待った「From The Vaults 2」がついに我が家に届く。もどかしい思いで封を開ける。CDを取り出してプレイヤーに載せる。果たして…！

予感は当たった。「From The Vaults 2」に収録されていた鹿児島ライブは、紛れもなく、友人Fの録音した音源だったのである！！

どうしてそれがその音源だと分かるのだと疑う人もいるだろう。同じ会場で、たまたま他の人が録音していた音源かも知れないじゃないかと……。それが分かるのだ。

それは、この音源の中に、僕らの声が入っているからだ。

演奏が始まる直前、僕らはオープニング・ナンバーは何だろうかという会話をしていた。僕が(「一触即発」に収録されている)「ピンポン玉の嘆き」じゃないかな、とささやいたその時、演奏が始まる。オープニング・ナンバーは彼らの代表曲「おまつり」だった。興奮した友人Mが、「おまつりだ、おまつりだ！」と口走り、「いゑー！」と叫ぶ……。こんなやりとりが、「From The Vaults 2」、CD5枚目の3曲目冒頭に収録されているのである。

僕がトレードで渡した音源がどんな経緯で四人隣子側に渡ったのか、知る由もない。ただひとつだけ残念なのは、もしこの音源をCDにすると事前に教えてくれれば、僕のテープを喜んで提供したのに、ということだ。音源のジェネレーションが若い方が当然音がいいからである。

長く生きてると、とんでもなく面白いことが起こる。この一件を同級生に話したら、「それはロックの女神の贈り物だ」といった。八百万の神の中でも、ロックの女神だけは僕のことを嫌いでないらしい。こんなに愉快的ことはない。